

02-005

小児科外来におけるバウムテストの有用性

古屋 彩夏、塩崎 純子、柳澤 敦広

JR東京総合病院 小児科

【背景】

小児は自分の状態や気持ちを言語化することが難しく、描画が有効な手段となることがある。バウムテストは投影法のひとつであり、本人が明確には自覚していない無意識の自己像を把握しようとする検査法である。教示も簡単で短時間のうちに施行でき、比較的低年齢から施行することができるため、小児科外来でも比較的導入しやすい。

【目的】

一般病院小児科の外来診療において、バウムテストを利用することにより、心情変化を客観的に描画の変化としてとらえることができるかどうかを検討すること。またその限界について検討すること。

【方法】

当院小児科外来においてバウムテストを用いて面談を行った症例について、診療録を後方視的に検討した。発表に当たっては、患者および保護者の同意を得た。

【結果】

(症例1) 日によって登校しぶりが強く、欠席が増えたことを主訴に来院した8歳女児。母が児に対して抱いている印象と、バウムテストで描出された児の内面とにかい離がみられた。児の特性や思いに対する母の理解を促すとともに、児に対する対応法を指導し、母子関係の構築を後押ししていった。2か月後のバウムテストでは、児の傷つきからの回復や将来への希望が見いだせるようになり、母からも「楽になりました」という発言が聞かれるようになった。

(症例2) 学校給食が食べられない7歳女児。バウムテストで描画はほとんど変化せず、児のこだわりの強さや認知のアンバランスさが浮き彫りになったものの、児をとりまく状況や事態はやや好転し、徐々に生活に適應できるようになっていった。

一方でバウムテストを使用した他の症例では、解釈が困難な場合や再現性に乏しい場面も認められた。

【考察】

バウムテストは解釈にある程度熟練を要するが、言葉を介した表出が困難な児にも簡便に施行でき有用である。また児の心理変化を追うことも可能である。繰り返し施行することで、治療効果の推定にも利用できると思われる。